

都道府県別賞一等

家族をつなぐ安心

岐阜県 大垣市立西部中学校 一学年

川瀬 哲広

「命あっても、長くは生きられないなあ。」

と口にするのが多くなった祖母。今年で八十八歳。日本人の平均寿命が年々延びて嬉しいけれど、四人に一人が六十五歳以上の超高齢社会になったという。そんなニュースを見ていたら、急に父が、

「お前も中学生になったから。」

と言いながら、僕を保険会社に連れて行った。そして、真剣な顔をして、

「二生涯、安心できる保障の保険がありますか。」

と父は相談を始めた。てっきり父の保険のことだと思っていたら、

「今、何歳だっけ。中学一年生だから十二歳か。」

と突然、僕の年齢の話になり驚いた。『まだ十二歳なのに。病気になったわけじゃないし。』と思いながら、保険会社の人の話を聞いた。

正直、僕には何ひとつ分からない言葉ばかりだった。でも、働き手のお父さんが病気で入院してしまうと治療費や入院費が必要になること、もしも亡くなってしまうと、残された家族が暮らすための生活費が必要になること、ものすごく大変だということは想像できる。その時の助けになるのが、保険であることを教えてもらい、僕は不安になったことがあった。

僕の祖父は、父が十五歳の時に病気で亡くなっていたので、父が思い出せるのは、疲れて寝ている祖父の姿だけだった。僕もあと三年後は十五歳になる。もしも父がいなくなると考えたら怖い、足が震えた。自分は、このまま高校や大学に行くことができるのか。兄弟や母、もしかしたら僕も働かなければ、生活することができないかもしれないと思った。だから、父には悪いが、健康でいてくれることが第一だけど、父こそ、しっかりとした保障のある保険に入っ

て欲しいと思った。

父のため祖母は朝から夜遅くまで働きながら、父を大学まで行かせてくれたそう。定年後も、地域のボランティアをしたり、習字を教えたりして働いていた。僕が小学生の時には、病気を心配して学校まで迎えに来てくれたり、宿題をさぼっているものすごい勢いで怒り出して教えてくれた。そして、「大好きなことをしているから元気で。病気になるっていられない。」

と毎日がんばっていた。その祖母が、八十歳の時にガンと診断された。その時に父は、初めて祖母の保険が八十歳までの保障だったと知ったそう。僕は、

## 第54回中学生作文コンクール

今からでも保険に加入したらと伝えたが、祖母は持病があり介護も必要だし、保険料を考えると難しいと父が言った。これから父が祖母を養い苦勞をするのではと不安はさらに大きくなった。幸いにも祖母は、要介護認定を受け、介護保険でデイサービスに通えるそうだ。今の祖母にとって、父や僕たち家族みんなが会いに行き、学校や部活の話をしてあげたり、祖母の好きな食べ物を一緒に食べたりすることが安心して生活できる力であり、備えになっていると思えてきた。

祖母のことから父が「生涯」にこだわる理由が分かった。だから僕も人任せにしないため、自分の生活に深く関わっている保険のことを学びたいと思った。

「長生きしなくちゃ。」

と言う父と一緒に、終身医療保険に加入した。安心して生活できるということ、は、僕にとつてかけがえのない大きな宝物である。父からの愛情がつまっていることを知り、これからの自分の生き方について考えることが大切だと思った。

もうすぐ僕は十三歳になる。祖父や祖母、父や母からももらった命。しっかりと守っていく責任があると思う。だから、僕の誕生日には、家族みんなに「ありがとう」の気持ちを伝えよう。そして家族の誕生日には、一歳長生きできた「おめでとう」の言葉を送りたいと思った。